

企業人の「三者」

企業経営漫談士 岡野実空

「五者」は、人生半ばの転職時に、先輩たち口伝の「コンサルタント」心得。いまは主に「教師」の心得として世に広まっていますが、その元ネタは、恐らく大日本麦酒社長・馬越恭平の標的顧客、「四者」(学者・医者・役者・芸者)でしょう。「五者」は、先達たちが東洋のビール王という巨人の肩に乗り、易者(あるいは記者)を加えたもの？

今回はそれを3つに絞り、理系・文系を問わない、企業人必須の資質や能力としての「三者」を考えます。

役者:「役割」を果たす人

「役者」とは、①役目ある者②俳優③知略・駆け引きなどに優れた人(広辞苑)。このうち①と③は、企業人にとって必須のものです。すなわち組織における自分の「役割」を確認し、それを果たして結果を出す。多くの企業で「目標管理」がうまく機能しない理由は、元々の「役割」の曖昧さに加え、組織の「期待」との不整合が大半です。またそれが明確になっても、後述の勉強不足で、知略を発揮できないこともしばしば。以前、セミナーで伺った某生命保険会社の役員リストには、正式の「役職」の横に、消し忘れた手書きのメモが。それは「〇〇専務(課長)」「△△常務(係長)」等々の中間管理職一覧表。実際その企業は、トップに相応しい「役者」の不在、という嘆きの正しさを証明し？その後間もなく、この世から消滅しました。合掌！

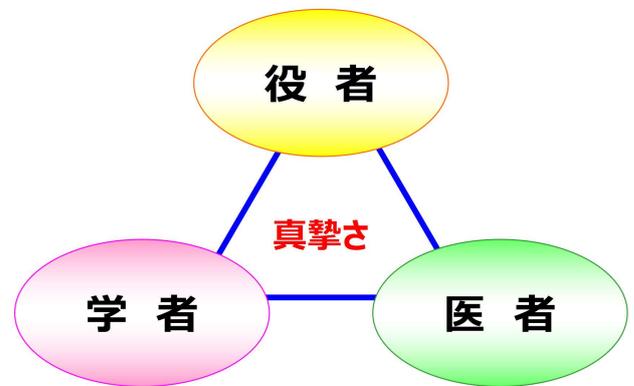
学者:「学習」する人

「学者」とは、①学問に優れた人②学問を研究する人(広辞苑)。企業人の場合、勉強好きだが、それが実務に活かされない人、という皮肉を含み、自分が勉強しない言訳や、嫉妬混じりで使われます。しかし「知識社会」で、勉強嫌いは論外。過去に例を見ないことだらけのいま、学習とは、自分なりに考えた「仮説」を「検証」する、「試行錯誤」の繰り返しに他なりません。また一方で、不変の「人間性」と、環境に応じて変化する「意識」という二面性を持つ、ややこしい「人間」研究も必須。前者は「歴史」という壮大な教科書から学べますが、後者は「社会」の長期的かつ多面的な観察から得られるもの。このようにいまの学習は、従来の「読書」や「座学」に加え、それを起点にした「考動」習慣が求められているのです。

医者:「顧客」の問題解決に貢献する人

「医者」とは、病気の診断・治療を職業とする人(広辞苑)。企業人にとってのクランケ(患者)は、語源も同じクライアント

KM E-13 企業人の「三者」



「顧客」。モノの汎用化が進むいま、「問題解決への貢献」というサービスの巧拙は、顧客が取引先を選別する重要な基準になりました。市販薬では治癒しない問題に、「かかりつけ医」として社外ならではの視点で関与できれば、私たちは「信用」と「安定取引」という報酬を得ることができます。

ここで、「易者」「芸者」についても一言。現代の「易者」は、さまざまな分野の専門家。経済でいえば、エコノミストという輩です。「統計」という笹竹を使い、社会の複雑化で「人口」以外は減多に予想が当たらないのに、法外なギャラをもらい、外れてもペナルティーなし、という厚遇。学者も基本は同じですが、嬉々としてマスコミに登場する輩は、「易者」と考えて間違いはありません。また「芸者」は、ときに「役者」の一部。さまざまな場面で、その「役割」に応じた立ち居振る舞いが求められます。そのとき、趣味・習い事など、「芸は身を助く」ですが、やり過ぎると「芸は身の仇」。磨き方は、ほどほどに。

最後に、天国のドラッカー氏から、今回の内容へ一言。「三者のように学ぶことも習得することもできず、もともと持っていないなければならない資質があります。それは才能ではなく、『真摯さ』です。御意！！

平成 29 年 7 月 31 日 実空